
組み間違いにはご用心

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

組み間違いにはご用心

【Zコード】

Z3545E

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

レストランでの夕食は、楽しいデートになるはずだった。だが彼と顔を合わせたあたしは、破局が間近であることをすぐに見てとる。素敵な彼の裏切りと、哀しい別れのものがたり。……と、いうほどシリアスなものではありません。

「あなた、ゆうべあの女と寝たでしょ」
あたしがそういうと、彼は得意げに語っていた武勇伝をふつつりと止めた。ナイフとフォークの動きが止まって、その先端が宙に泳ぐ。彼はいかにも心外だといいたげに目を丸くして、あたしの顔をまっすぐに見た。

「そんな。僕は誠実な男だ」

「コイツ、時代がかつた台詞を吐きやがる。こういう演技はバツグンに上手い男なのだ。あたしはそれを無視して、『ゴルシカ産とかいう赤ワインをぐいっとあおつた。

「彼女とひとつになる気分、どんなだつた?」できるだけ嫌みをこめていってみる。

「誤解だよ。どうしてそんなこと思いついたんだい?」

「あなたの顔に書いてあるの」

「まさか。『あなたの素敵な彼は、わたしが頂戴いたしました』とでも? 僕は一人の女性しか愛さない。君も知っているじゃないか」
彼の頬がわずかに引きつっている。

「昨日までは、あたしもそう思っていたわ。学校でそつ脱つたもの。信用したあたしのミスよ。悪いけど、あなたとはもうこれでお終いにさせて頂きます」

あたしはそう言い捨てるが、手早くテーブル・ナップキンで口の端を拭つた。ハンドバックを手に掴み、椅子を蹴立てて立ちあがる。こういう場合、決然と振る舞わないと情に負けてしまうのだ。だつて未練がないわけじやないもの。

「待つてくれ。昨日の晩、僕は君の部屋にいたじゃないか。そんなこと、できるはずないよ」

「できるはずのないことをやつたんでしょう。あなたらしいじやない。触らないで!」

手を握つて止めようとした彼の胸を、あたしは思いきり掌で突いた。途端に彼の服にヒビが入り、音を立てて全身に広がつてゆく。ああ、やつちやつた でも、彼のせいよ。しかし、この期に及んで私の目をじつと見すえる強い意志はさすがだつた。この伊達男、今まで一体どれくらい沢山の人間を騙してきただろう。だが体を碎く不調和の波はあつといつまに彼の全身を覆い、服も肉も彫りの深い顔も一緒に崩れ落ちて、あつという間に四千個の力ケラに分解してしまつた。

ばらばらと音たてて赤い絨毯に広がつた彼のピースを無視して、あたしはつかつかと出口に向かう。後ろで彼がウェイターに「掃除機は止めてくれ！」と叫んでいるのが聞こえた。会計には彼がフラン・ジョルミニナルで支払うと告げ、あたしはレストランをあとにする。

まったく人をバカにしている。一晩だけ箱を並べたからつて、すぐになんかことになるなんて。彼 ナポレオン の頬のピースが、ひとつモナリザと入れ替わつっていたのだ。

あーあ、しばらく人物画はやめよう。そういうえばペンギンの一千六百ピース、ショップに入荷してた気がするな。今度はあれ、やろうかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545e/>

組み間違いにはご用心

2010年12月15日14時35分発行